

## 「信じることと行うこと」 (エフェソ二章四〜一〇節)

### 1 信なくば立たず

「信なくば立たず」という言葉があります。若い人にもぜひ知っていてほしい言葉です。『論語』(三八)の言葉として一般に知られています。信とは人偏にんへんに言ことばで、言ったことが信じられるということ、言葉だけでその人を信用することができるということ、つまり偽りのない、人と言葉が一致している、誠実なことです。子貢に政治の要諦を聞かれて孔子は兵と食と信と答えます。その中で、兵も食も大事だけれど、やっぱり信が、それなくして何も立ちゆかない、もっとも重要なものだといったのです。じっさい信こそ政治だけでなく私どもが毎日の生活を営んでいく上でもっとも大事なものだとも思います。

同じような言葉が聖書にもあります。旧約聖書のイザヤ書です。紀元前八世紀のユダ王国に、敵対していたアラムとエフライムが同盟を結んだという知らせが届いて民は動揺します。その時イザヤが告げた神の言葉です、「もしあなたがたが信じないならば、立つことはできない」(イザヤ七章九節 口語訳)。イザヤは敵国のおどかしは決して実現しない、むしろ神の言葉を信じ、神の約束に信頼し、落ち着いて、静かにしていなさいと語ったのです。

もう一つ、信、信頼ということだと思いきすのは、これも皆さんご存じの、若い人も知らない人のいない、太宰治の『走れメロス』です。戦前の古い短編ですが、いまでも教科書にのっているかもしれません。あまりにも有名ですが、思い出していただくために少し申し上げます。暴君の王様を成敗しようとしてつかまってしまった田舎の青年メロス、王から三日の猶予をもらって妹の婚礼に国に帰ります。戻ってこないのではないかと疑われて親友セリヌンティウスを身代わりに立てます。戻ってこなかったらその友が代わりに殺されるわけです。婚礼を終えて急いで都に戻るメロス、途中予期しないいろんな障害に見舞われて、帰還はぎりぎりになります。しかし間に合って抱擁し泣き合う場面に私どもはみな小学生も中学生も感動してしまうわけですね。ところで途中メロスはこういう言葉を吐いています。身代わりになった友セリヌンティウスの弟子が、もう間に合わない、間に合わなかったらお恨み申しますといいつつ、もう走るのをやめるように、自分の命をいまは大切にするようにとメロスを諭す場面です。この弟子の忠告にメロスはこう言います。「それだから、走るのだ。信じられていながら走るのだ。間に合う、間に合わぬは問題でないのだ。人の命も問題でないのだ。私は、なんだか、もっと恐ろしく大きいもののために走っているのだ。ついて来い、フィロストラトス!」。物語の最後のシーンは、王も、メロスとその友の互いの信頼(信実)に感激して、わしも仲間に入れてくれなにかと申し出るようになります。漫画のようでいささか滑稽なのですが、じつはこの残虐な王は、自分の周りの人間を次々に殺した思いを「人を、信ずることができぬ」からだど吐露していたのです。この話は、まさに信ということ、信頼し合うということの大切さを語って

る寓話です。

## 2 信仰とは信頼

信じること（信仰）、信実、信頼という、つまり信という語をふくむ言葉が指し示していることは、いま少し申し上げたように、人間と人間のあいだだけでなく、神と人間のあいだにおいても、もつとも重要なことです。

今日の聖書箇所には、キリスト教の救い、福音の中心に関わることとしてこの信が語られています。

事実、あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。行いによるものではありません。それはだれも誇ることがないためなのです。（6-8節）。

ここに「恵みにより・・・救われました」とあります。この恵みはただ一般的な意味でお恵みというわけではありません。その恵みにより、と元の聖書の言葉にはありません。キリストにおいて示された恵みです（「神は、キリスト・イエスにおいてわたしたちにお示しになった慈しみにより」七節）。神の子イエス・キリストが十字架にかかって私どもの罪をあがなったということ、このキリストは甦って私どもにも新たな命に歩む道を開いてくださったということ、そのようにして神とともに歩むことができるようになったこと、このことは神によって開かれた現実です。私どもの関与以前のこと、私どもが勝ち取ったのではなく、与えられたのです。

救いは私どもにキリストにおいて与えられたのです。救いとは私どもが、苦しみから、困っていることから、危機から解放されることです。それだけではない、私どもが罪から、そして死から救済されることです。端的にいえば、神無きところから救い出されることです。神は私どもに手を差し伸べてくださり、どんなときも生においても死においてもいてくださるということです。

しかしこの、いわば客観的な現実が「信仰によって」私どものものとなります。聖霊によって私どものものとなります。それが「信仰によって救われました」ということの意味です。ですから信仰とはここでは、まず第一に受け入れることです。私どもがすでにキリストにおいて神に受け入れられていることを受け入れることです。私どもが受け入れられているというのを信じて、受け入れてくださった方を、恵みを与えてくださった方を信頼して受け入れることです。その意味では信仰とは神への信頼のことです。

ですから行いによって救われるのではないことは明らかなのですが、パウロがわざわざ「行いによるものではありません。それはだれも誇ることがないためなのです」と付言しているのは、行いによって救われると考える人たちが当時いたからです。ユダヤ人でキリスト教徒になった、それはいいのですが、キリスト教徒になってもユダヤ教時代の掟を引きずっていた人たちです。

行いによつてとは、そうした掟を守る行いによつて救われるということです。彼ら

の考え方はだいたいこうです。メリットという言葉がわれわれいまよく使います。メリットがあるとかないとか。メリットというのは、報われる、その意味で得をするということ。彼らは掟を行うことをメリットがあるものと考えたのです。そうした分だけ神からごほうびをもらえるというわけですね。神に対し自分の行いを誇る、他人に対して誇るといふことになりません。それによって神に受け入れられる、それが神との関わりを保つ道だと彼らは考えた。そうすると、私はいま信、信頼ということを考えているのですが、彼らの神との関係は根本的に信とか、信頼というものではありません。神を取引相手と考えている。そのかぎりでの神への信はあるのでしょうか、本当の信頼関係というものはそこにはない。メロスが、信じられているから走るので、間に合う、間に合わぬは問題でないのだ、といったとき、メリットや結果ではなく、信で互いに結びついた、信頼で互いに結びついた関係が、彼には問題であった、それに彼は忠実であろうとした。つまり信仰とは信頼です。言い換えれば、信仰とは、神は私のためにいますのだということに依り頼み、その確かさの中に生きるということ。です。

### 3 行いの意味

「行いによるものではありません」（九節）とパウロははっきり述べています。まさにその通りで、救いに関しては、行いによって、掟を行い守ることによって達成されるわけではありません。

しかし神を信じるということは、神に従って歩むということであり、神の御心を行うということ。何が御心か、私どもに与えられた判断する力を用いながら御心を行う、それが私ども信仰者の生活です（ローマ二章一―二節）。そのことを今日の聖書は次のように語っています。

わたしたちは神に造られたものであり、しかも、神が前もって準備してくださった善い業のために、キリスト・イエスにおいて造られたからです。わたしたちはその善い業を行って歩むのです（一〇節）。

「善い業」と訳されているその「業」という言葉は、前の節で「行い」と訳されていたのと同じです。ここでは複数です。あれこれの善い業です。それをなすべく私ども造られたと言っています。ただしここでは、そのあれこれのことには何も触れていません（この手紙全体で言えば、四章あたりから手紙の著者パウロが具体的に書いていることがそれにあたります）。

今日はもう少し基本的なことを申し上げたいと思います。手がかりとしたのは宗教改革者ルターの『キリスト者の自由』（一五二〇年）という本です。この本は文庫本でも四〇頁の満たない小著ですが、ルターの代表作であり、変な言い方をすればプロテスタントのバイブルです。

ルターも使徒パウロと同様に、救われるための行い、律法の行い、義とされたための善い行いを徹底して否定します。それでは善い行いはまったく要らないというのでし

ようか。要らないならなぜ聖書にそうした行いのことが勧められ、命じられているのでしょうか。ルターによれば、それは、私ども人間が内面的な霊的な存在であるだけでなく外面的な身体的な存在でもあるからです。またそうしたことも含めて私どもはまだ地上にあつて人々と共に生きている、未完成な途上の生活を送っているからにほかなりません。

じつさい私どもは内的にも外的にも強くない。救われたといつても、義とされたといつても、私どもの中には、この世に横目を使い、自分の欲するものを求めようとする思いが、息の根を止められずに存在します。そうした中で神の鍛錬を受ける（ヘブライ二二章）こと、修練はなお必要なことです。そこに信仰の行い、善い業の必要性があることになります。

それだけでなく、ルターはもつと積極的なことを語り、勧めています。恵みにより救われ、信仰によってそれを受けとめ、キリスト者となるということは自分自身のために生きるのではなく（コリント五章一五節他）、キリストと自分の隣人とおいて生きることを意味します。彼の言葉を一つ紹介します。「このように、ありあまる財宝を注ぎ与えてくださった、こういう父に向かつて、私もまた自由に、喜んで、報いを求めず、神の喜びたもうことをしよう。そしてキリストが私に対してなつてくださったように、私も隣人に対して一人のキリストとなろう」（二七）。この最後のところ「一人のキリストとなろう」は、「一人のキリスト者となろう」としている版もあります。そのほうが分かりやすいと思いますが、いずれにしても信仰の行いが私どもにも求められているのです。

信仰とは神への信頼です。また信仰とは隣人と共に生きることです。そのことを申し上げてきました。最後に、それに加えて、信仰とは告白であることを申し上げたいと思います。

ペトロのことを思い起こしていただきたいのです。彼はイエスの一番の弟子でしたが、イエスが十字架につけられようとしたとき、お前もこのイエスの仲間の一人ではないかと疑われ、そうだとはいえず、否んでしまいます。すべての福音書が証言しています。しかも三度も否んでしまいます。じつはそうなるということをイエスから言われていた。しかし言われたとき彼はそんなことは絶対にありません、他の弟子たちがそうしても自分だけはそんなことは言いませんと、まことに勇ましく誓っていたのです。その決意を披瀝して、すぐに彼は否んでしまいます。

ここです！ つまり、ペトロがそのとき否まなかったとしたら、それは彼の信仰の告白でした。自分に何のリスクもない、不都合もないときではなく、認めることが自分の不利益になる、そのところでしょうかし、イエスをわが主と告白すること、これが信仰の告白です。神への信頼において隣人と共に歩みイエス・キリストを主と告白していきたくいと祈ります。

（二〇一八年八月二二日）